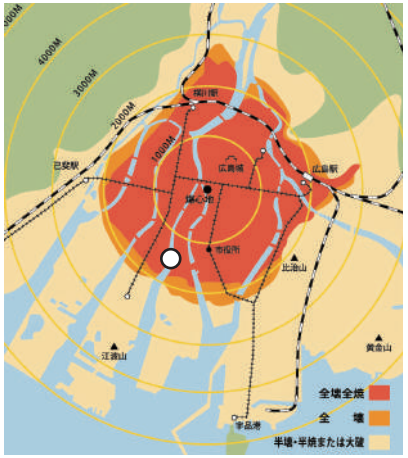
服は燃え、皮膚も剥がれて
（８月６日夕方、住吉橋東詰）

被爆体験証言者　飯田　國彦

76回生　今田　颯之介

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）



描いた場面

被爆したのは爆心地から約900mの母の実家です。当時の水主町（現在の加古町）で、中島小学校の東、万代（よろずよ）橋の少し南です。家の中で被爆した人は、みんな生き埋めとなりました。３歳のボクは、「お母ちゃん、タスケテー」と叫ぼうとしましたが、声が出ませんでした。暫く経って、祖父に掘り出されました。
母は４歳の姉の手を引き、ボクは叔母（母の妹）に抱っこされて、住吉橋東詰に辿り着きました。裸足なので瓦礫が熱くて大変だったと、後で叔母から聞きました。叔母もボクも全身血だらけでした。大勢の人が血だらけで裸足で集まってきました。みんな体中に大けがをしていました。
家の外で被爆した人たちは、靴は履いていましたが、服は燃えて無くなり、皮膚は剥がれて垂れ下がっていました。まるで幽霊のように腕を前に出して、「水、水、水」と唸りながら、あちこちから沢山の人々が、ここへ集まってきました。ここはかねてより集合場所に決められていて、避難用の船を待っていたと思われます。待っている間に黒い雨（放射性物質）が降ってきました。

生徒のコメント

今回私は、言葉だけでは伝え切れない平和の大切さや原爆の悲惨さを絵にして具体的に伝えるために、原爆の絵の制作に初めて取り組みました。以前は原爆の表面的な出来事しか学んでいませんでしたが、飯田さんが実際に経験された一場面を具体的に証言して頂くことで、原爆の恐ろしさを強く感じることができました。私は今回の制作において、一人一人の怪我の様子や人々が苦しんでいる表情、仕草などを表現するのにとても苦労しました。この絵の場面では多くの人々が集っていますが、一人一人がそれぞれの体験と様々な想いを背負ってここに辿り着いたということを想像し、もし自分がこの絵の中にいたとしたら、とイメージして頂ければと思います。

被爆体験証言者のコメント

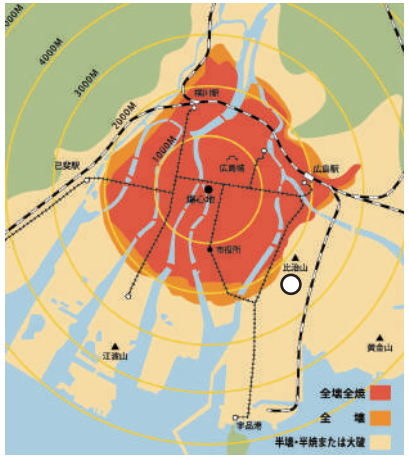
母と姉は避難先の山県郡の新庄で力尽き、足から壊死して亡くなりました。ボクは家族が亡くなり一人ぼっちになってしまったので、父方の祖母が養ってくれることになりました。祖母が優しかったのでボクはまだ幸せでした。しかし、２年半後の祖母の死後は、心身ともに苦しく厳しい人生の始まりとなりました。
今田君には格別のご尽力を頂きました。厚く御礼申し上げます。見たことがなく、想像することも難しい原爆の実相を、艱難辛苦の末、見事に描き上げてくれました。心より感謝致します。

校庭で、原爆で亡くなった人のお骨を拾う

被爆体験証言者　笠岡　貞江

75回生　大道　葵

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）



描いた場面

原爆投下後、戦争も終わり、同級生と女学校に行きました。校舎は焼けて
校庭が広く感じられました。焼け跡の校庭に、亡くなった生徒達のお
白い小石のように散らばっていました。私たちはそのお骨を茶碗のか
に拾い、決められた缶に集めました。先生もいらっしゃったので、指示
に動きました。
集めたお骨の中には友達の遺骨もあったと思いますが、何の感情も
なかったのが不思議です。これも戦争のせいだと思います。戦争は
にしてはならないことです。

生徒のコメント

最初にお話を伺った時、無表情でお骨を拾ったと聞き、驚きました。悲
など、色々な感情を抱いているにもかかわらず、表情は無で涙も出なか
というのは、きっと想像もつかないほどの悲惨さがあったのだろうと感じま
原爆の絵の制作に当たり、証言者さんと何度も打ち合わせを行いま
が、証言者さんから直接お話を聞くことはなかなかできる経験では
ので、原爆の絵を通して原爆への理解をより深めることができました。
証言を元に絵を描くというのは、分からないことも多く難しかったです
実際の状況と原爆の悲惨さ、決して起きてはならないということを、
でも絵で伝えられたらと思います。

被爆体験証言者のコメント

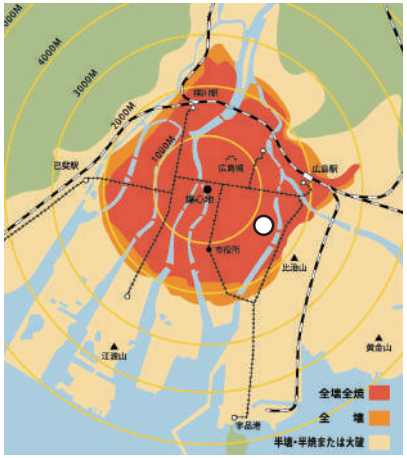
生徒達の多くのお骨。拾うときは無表情であっても、見る人は何かを感
下さると思います。戦争、原爆の悲惨さがここにもあります。よく描いて
りありがとうございました。

背中を大火傷した父

被爆体験証言者　川崎　宏明

75回生　谷口　世那

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）



描いた場面

鶴見橋西詰を自転車に乗って東に向かっていたところ、背後から熱線と爆風を受けました。自転車もろとも跳ね飛ばされ、気がつくと地上に横たわっており、背中一面、大火傷を負いました。薬が十分に無かったため、小麦粉、油、赤チンを混ぜたものを布に塗って火傷に貼り、火傷した部分が床に触れないよう常にうつ伏せで家族からの看病を受けました。

生徒のコメント

描き始める前、「苦しんでいる父の姿を描いて欲しい」という川崎さんの言葉に胸を打たれました。人々の体や心に深い傷を残し、このような言葉をも言わしめる原爆の恐ろしさを実感すると同時に、ぜひ川崎さんと一緒にこの絵を完成させたいと思いました。

熱線を浴びる瞬間の様子や火傷の様子など、想像しきれず難しい部分もありましたが、たくさんの資料を見比べたり、アドバイスをいただいたおかげで描くことができました。人々を長期的に苦しめる戦争や原爆について、より多くの人が知識を持ち、考えてほしいと願っています。

被爆体験証言者のコメント

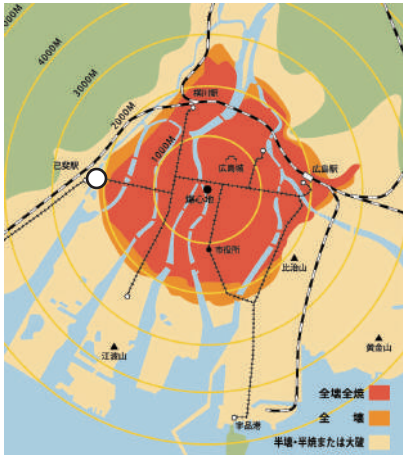
背中一面を火傷し、うつ伏せのままの父、看病する母、それを見守る3人の幼子。いまさらながら８０年前の原爆の恐ろしさを思い出しました。　折しも「Ｇ７サミット」が広島で開催され、原爆の恐ろしさが世界中に報道された今、何度も描き直し、少しでも実態に近づけようとした谷口世那さんの努力に最大の敬意を払います。谷口さんと指導くださった先生方、有難うございました。

電車の窓より見た遺体処理の光景

被爆体験証言者　廣中　正樹

75回生　永井　咲楽

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）



描いた場面

１９４５年８月１０日午後２時、己斐駅前電停の向かい土手の光景。母と妹とともに乗っていた電車の窓から、兵隊さんたちがトラックで運ばれた多くの遺体を下ろして並べる姿を見た。とび口のついた棒を遺体に打ちつけて動かす姿に惨さを感じた。遺体が枯れ葉を集めるごとく処理され、心が痛んだ。電車の鉄橋には、歩いている途中で息絶えたと思われる、倒れた人の遺体があった。家族のもとに帰る途中だったのだろうと思い、胸が痛んだ。
この人たちの身元はどうなっていて、遺骨はどこへ行ったのだろうか。

生徒のコメント

廣中さんの証言を聞きながら絵を描いていく中で、自分が、戦時中のことや原子爆弾がもたらした被害、人々に残った傷について全く知らなかったということを痛感しました。私にとって戦争は、遥か昔に起きた恐ろしいことで、私たちとはかけ離れたものだと思っていました。ですが、たくさんの大切なものを失ったあの出来事は、私たちと同じように当時を生きていた人々の身に現実に起こったことで、私たちにも起こりうることなのだと気づきました。
この絵が少しでも廣中さんの証言活動の助けとなり、廣中さんの思いを伝える力になれたらと思います。廣中さん、本当にありがとうございました。

被爆体験証言者のコメント

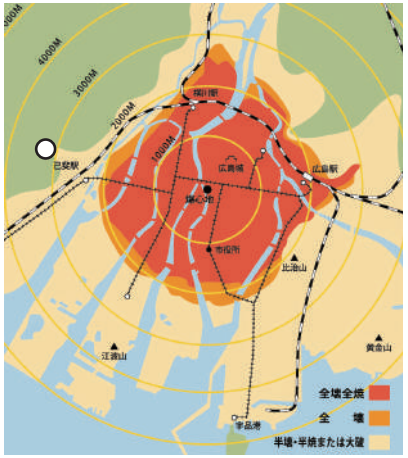
この絵は私が車窓から見た光景です。この処理をされている、とび口を打って遺体を移動させている兵隊さんの気持ちや思いはどのようなものだったのでしょうか。遺体は腐敗していて、ハエなどの虫や悪臭の中での処理の仕事は大変な作業だったと思います。
この様子を思い浮かべ絵にされた永井さんの心の痛みが分かるようです。ありがとう。

強烈な刺激
～何故父は僕にこんな事をさせたのか

被爆体験証言者　廣中　正樹

75回生　福本　あおい

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）



描いた場面

8月6日、午後8時30分、自宅２階の階段上。勤め先に向かう途中、紙屋町付近を通っていた電車の中で被爆した父は、全身火傷で心も身体もボロボロの状態だった。帰宅した父は「早く横になりたい」と２階へ登った。父は階段の上で、５歳の息子である私に「背中のガラスを抜いてくれ」と頼んだ。父の背中には分厚いガラス片がたくさん食い込んでいた。
私は自分の手よりも大きなペンチを必死に持ち、一生懸命ガラスを抜こうとしたが、ガラスの先端が割れるだけで、最後まで一つも抜く事が出来なかった。父は５才の手指ではガラスを抜くことはできないと知っていたはずなのに、何故そうさせようとしたのか。父の背中を我が子の脳裏に焼き付けた、父の思いが分からない…。

生徒のコメント

初顔合わせ会で廣中さんの証言を初めて聞く中で、自分が知らなかった新たな現実に大きな衝撃を受けました。自分は今まで受けてきた平和学習で、原爆のことを全て理解していた気になってしまっていたのだと痛感しました。それと同時に、このお話を初めて聞いた時の痛み、廣中さんの想いを一枚の絵に表現することが出来るのだろうかと、不安な気持ちでいっぱいになりました。しかし、廣中さんをはじめ様々な方の支えがあり、この一枚を完成させることが出来ました。
何度も打ち合わせを重ね、何度も描き直し、試行錯誤しながら描き上げていった作品です。この絵を見て、戦争をするということの「痛み」について少しでも考えて頂くことが出来たら幸いです。この度は本当にありがとうございました。

被爆体験証言者のコメント

この絵の場面、７８年前の当時の父子の場面が浮かんできて、涙が止まりません。父が５歳の息子に何を訴えようとしたのか、気持ちが分かるようで分からない。福本あおいさんの絵により、当時の一場面がよく描かれています。父の思い、子供の思い、親子愛が感じられる。本当に良く描いて頂き感謝しています。ありがとう。

多くの遺体が一度に火葬されたあの日

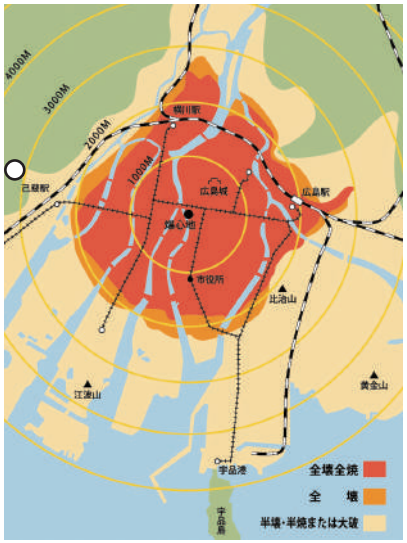
被爆体験証言者　廣中　正樹

76回生　益田　姫奈

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）

描いた場面

１９４５年８月８日午後４時から５時頃、己斐上一丁目付近。原爆投下後、地域の火葬場「苅場」に、多くのご遺体を火葬するために急遽、火葬場が作られ、そこに父の遺体を運んだ。火葬場として３つの大きな穴が掘られており、１つの穴に１５から２０体ほどのご遺体が並べられていた。この内数人の方は身元不明と聞いた。身元が分かる方の頭の方側には木製の名札が穴の縁に差し込まれていた。一度に多くのご遺体を火葬するため、火が回りやすいようにご遺体の下にはたくさんの丸太や割木、松の枝などが敷き詰められていた。
父の遺体を左側の穴の一番手前に置いてもらい、遺体がよく燃えるように遺体の下に松葉や割り木をたくさん入れた。この後、午後６時頃に一斉に火を点けることになっており、私は母に「正樹、お前が火を点けなさい」と言われ、マッチで松葉に火を点けた。



生徒のコメント

私は今回、原爆の絵の制作に参加したことで、これまでの平和学習とは全く違った形で原爆のもたらした悲惨な状況や被害について知ることができ、とても貴重な学びになったと感じました。今回描いた場面は、普段の生活の中では絶対に目にするような場面ではなかったので、証言を聞きながらも想像することが難しく、制作する中でとても苦労することが多かったです。ですが、証言者さんから直接お話を聞く中で段々と理解することができ、ここまで描き切ることができました。
私たちの世代は被爆者の方からお話を直接聞くことができる最後の世代だと言われているので、私の絵を通してこの貴重な経験で得た多くのことが、この絵を見た方にも伝わってくれたらと思います。

被爆体験証言者のコメント

益田さんに話したことがよく伝わっていると感じました。一度に多くの遺体が並べられ、身内の人達が手を合わせて悲しんでいる姿がよく分かる。多くの遺体を並べた絵を描くために大変時間も掛かったことと思います。
ありがとう。「感謝」。

黒い霧が漂う中、私は父の遺骨を拾った

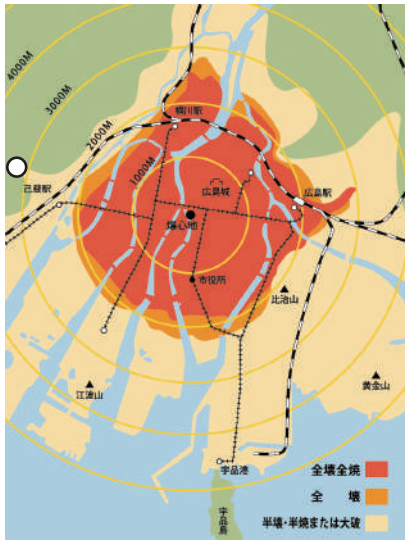
被爆体験証言者　廣中　正樹

76回生　持田　杏樹

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）

描いた場面

１９４５年８月９日、己斐上一丁目付近、町内の火葬場。朝７時頃、原爆によって亡くなり、前日に火葬した父の遺骨を拾いに、母と妹と私、町内会長さんと一緒に火葬場に行った。父の遺骨は綺麗に残っており、骨壷が遺骨でいっぱいになった。火葬場は原爆投下後に急遽作られたものであり、一度に多くの遺体が火葬された。遺体の中には、火力が弱かったために完全に焼け切れず半焼けで火がくすぶっているものもあった。父の遺骨を拾うために火葬場の穴の中に入ると煙で薄黒く、人の焼けた匂いが漂っており気持ちが悪かった。火葬場の後ろには山、下には川があり、遺骨を拾いに行った朝方には霧がかかっていた。その霧はまるで原爆で無差別に殺されてしまった人々の魂、無念の涙のようだった。あの魂の霧はどこへ消えていくのだろう。



生徒のコメント

原爆の絵は、私たちが実際に体験したことのない悲惨な情景を、証言者さんの証言の元にイメージを膨らませて制作していくものです。そのため、証言者さんの記憶と私自身が想像した情景とが一致せず上手くいかないことがたくさんありました。魂のような霧を描くということになった時、イメージをなかなか掴むことができず苦戦しましたが、証言者さんと打ち合わせを重ね、多くの資料を見ることで、だんだんと証言者さんが伝えたいものに近づいてきました。
この作品が世界中の多くの人に原爆の悲惨さや平和の尊さを考えるきっかけになることを心から願っています。

被爆体験証言者のコメント

この作品を見た時、私の証言が持田さんによく伝わっていると感じました。父の遺骨を拾いに行った時の光景がよく描けています。薄黒い霧の中にある多くの人々の遺骨や、火力不足で半焼けになっている遺体、悪臭の中で遺骨を拾った当時の状況が思い出されました。次々と遺骨を拾いに来られた身内の人の姿が思い出されます。
本当によく描けています。持田さんありがとう。「感謝」。

赤子を抱き、腕から血を噴き出しながら「助けてェー」と叫んでいる母親

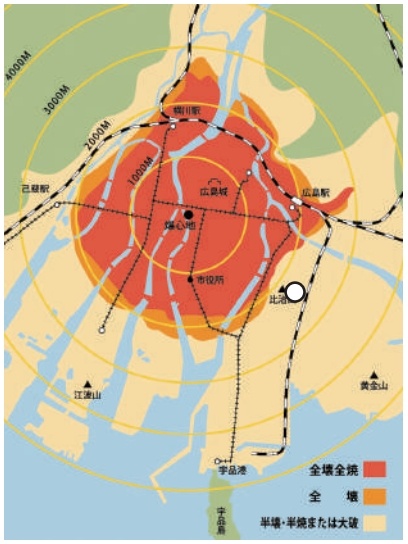
被爆体験証言者　山瀬　潤子

75回生　木村　光希

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）

描いた場面

原爆投下後間もなく、隣のおばさんが幼児を抱き抱え、山瀬さんの家の前のバス道路で「助けてェー、助けてェー」と叫んでいて、左手から血が吹き出していました。近所の人はパニック状態で、誰も助ける余裕がなかった。



生徒のコメント

「『助けて』と叫ぶ表情」「血が吹き出している」「赤ちゃんを抱きかかえている」という、三つの大切な要素を1つ1つ、どうやって表現するかということに苦労しました。人物が主役になる絵だったので、出来るだけリアルに描くことを意識しました。

原爆の絵を通して、広島に住む高校生として、山瀬さんのお話を絵で表現し、平和について向き合う機会を得られて良かったです。少しでも多くの若い世代の人や広島県外に住んでいる人の目に留まれば良いなと思います。

被爆体験証言者のコメント

顔合わせ会の時には、言葉ではなかなか伝えにくい場面、状況の映像をどうにか言葉で伝えたつもりでした。そして絵の制作途中では、絵を見ながら意見を交わしたり、メールで画像を送ってもらって確認しました。絵がほぼ完成の段階で訂正を求めたりもしました。大変申し訳なく思っております。お陰さまで被爆の悲惨さが伝わる良い絵に仕上げてくださいました。ご苦労様でした。有り難うございました。感謝！

必死に遺骨を守る気の狂（ふ）れた女

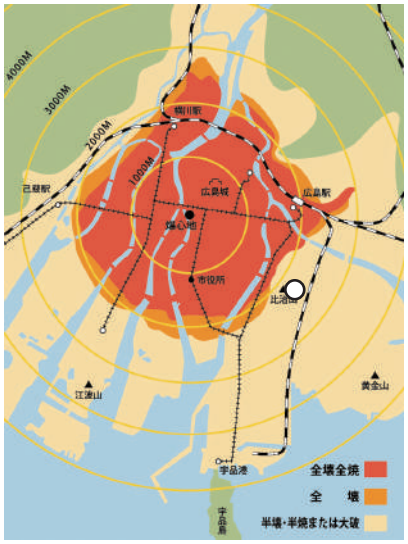
被爆体験証言者　山瀬　潤子

76回生　田邊　美羽

令和4（2022）年度制作　油彩画（F15号）

描いた場面

終戦前後、比治山の麓の防空壕前を通りかかったところ、シーツを身に纏い頭髪を乱した女が棒を振りかざし、血相を変えて私を追い払うのです。四角い物を白い布に包んだものが防空壕の奥に置いてあるのが目に止まりました。とっさに遺骨だと解りました。「あの女の人は気違い（きちがい）なのだ。原爆で気が狂ったんだ」と、直感しました。原爆は人の心をも破壊するのです。



生徒のコメント

原爆によって心に深い傷を負った女性の内面を描きあげることが難しく、何度も表情を描き直しても納得のできるものが描けずに苦しみました。しかし、もし自分がこの女性の立場だったとしたら、どのような感情を抱くだろうかと考えながら描くことで、納得のいくものを描きあげることができました。

被爆体験証言者のコメント

絵を描くに当たって、田邊さんご自身、布を身に纏い棒を使ってポーズをとり、写真に撮ってメールで送って下さいました。基町高校で打ち合わせをしたり、メールのやり取りで確認しながら進行しました。当時の状況を説明することの難しさ、現代を生きる高校生の田邊さんが当時をイメージすることの難しさを強く感じました。
絵の完成の追い込みと学期末試験が重なり大変でしたね。申し訳なく思っております。貴重な立派な絵が完成して感謝でいっぱいです。ありがとうございました。